

⑯ 日本国特許庁

公開特許公報

(4000円) 特許願 (特許法第38条ただし書の規定による特許出願)

昭和50年8月18日

特許庁長官 葉 藤 英 雄 執

1 発明の名称 電気接点材料

2 特許請求の範囲に記載された発明の数 2

3 & 発明者 東京都中央区日本橋茅場町二丁目一四番地三
タナカ キキンゾクコウギヨウ
田中貴金属工業株式会社内
エザワノブヤス

4 & 特許出願人 江澤信泰 (ほか2名)

チユウオウクニホンバシカヤバチヨウ
東京都中央区日本橋茅場町二丁目一四番地三

タナカ キキンゾクコウギヨウ
田中貴金属工業株式会社

代表取締役 田中淳一郎

5 & 代理人

東京都新宿区西新宿6丁目17-23
ストークビル新宿601号室
50-099947

(5712) 弁理士 梶谷昇 次

電話(03)343-3731番(代)

6 &添付書類の目録

(1) 明細書 1通 (3) 図面 1通
(2) 委任状 1通 50-099947

⑯特開昭 52-23660

⑯公開日 昭52(1977)2.22

⑯特願昭 50-99947

⑯出願日 昭50(1975)8.18

審査請求 未請求 (全4頁)

序内整理番号

6843 57

6843 57

6554 42

⑯日本分類

59 A3
62 A1
10 L24

⑯Int.C12

H01H 1/02
H01B 1/02
C27C 5/06

BEST AVAILABLE COPY

電気接点材料に係る。

従来から耐溶着性、耐消耗性等に優れた銀-酸化物系の電気接点材料としては、銀-酸化カドミウム系の電気接点材料が広く用いられてきた。

しかしながらカドミウムは人体に有害な物質であり、溶解中蒸発しやすいため設備が必要となり、その使用は望ましいものではない。一方、銀-酸化物系の電気接点材料の中にはカドミウムを用いない電気接点材料として、既に銀-酸化インジウム-酸化錫系の電気接点材料があるが、この銀-酸化インジウム-酸化錫系の電気接点材料は中-大電流域において、耐溶着性の点で満足できるものの耐消耗性の点で銀-酸化カドミウム系の電気接点材料に劣り、その使用範囲、使用条件がかなり限定される。このようなことからカドミウムを用いることなく、良好な耐消耗性を有する電磁開閉器用電気接点材料の出現が強く要望されている。

そこで本発明者は、前記要望を満たすことできる電磁開閉器用電気接点材料を開発すべく銀-酸化インジウム-銀-錫-銀-亜鉛系の電気接点材料を研究すべく試験研究の結果、均一に分散した層状組織を有し充電

明細書

1. 発明の名称

電気接点材料

2. 特許請求の範囲

(1) 内部酸化法で製造される銀-酸化物系の電気接点材料において、インジウム1~7%と錫1~7%と銅1~5%と亜鉛1~4%と残部銀となり、インジウム、錫、銅、亜鉛の合計が15%以下である電気接点材料。

(2) 特許請求の範囲第1項に記載の電気接点材料に、付加的にカルシウム、セリウム、コバルト、鉄、ガリウム、ランタン、アルミニウム、シリコン、チタン、リチウム、マグネシウム、ニッケル、マンガン、ケルマニウムのうちの少なくとも1種を含んで、その総含有量が0.7%以下である電気接点材料。

3. 発明の詳細な説明

本発明は内部酸化法によつて製造される銀-酸化物系の電気接点材料、特に電磁開閉器用の電気接点に適する銀-インジウム-錫-銀-亜鉛系の

たで消耗性を有する電磁開閉器用電気接点材料として、銀にインジウムと銅と亜鉛と錫とを共添加した合金を内部酸化してなる電磁開閉器用電気接点材料を見い出したのである。

本発明の電磁開閉器用電気接点材料の1つは、銀中に導性の少ないインジウムを1~7%と、銅を1~7%と、錫を1~5%と、亜鉛を1~4%とを合計で15%以下溶解せしめて銀-インジウム-銅-錫-亜鉛系合金とし、しかる後にこれを酸化性雰囲気で加熱することによつて内部酸化せしめたものである。

又本発明の電磁開閉器用電気接点材料の他の1つは、前記の銀-インジウム-銅-錫-亜鉛系合金に、付加的にカルシウム、セリウム、コバルト、鉄、ガリウム、ランタン、アルミニウム、シリコン、チタン、リチウム、マグネシウム、ニッケル、マンガン、ゲルマニウムのうちの少なくとも1種を含み、その総含有量を0.7%以下にして、これらを内部酸化せしめたものである。

銀中にインジウムと銅と錫と亜鉛とを共添加す

(3)

亂さない結果耐消耗効果を顯示せず、しかも銀中にインジウムと錫の共添加による優れた耐溶着性を保持できるのである。

次に前記の如く成分組成範囲を限定した理由について説明する。インジウムを1%以下にすると付加的付加とあまりならず、耐消耗性に優れたインジウムの効果が著しく減少し、7%以上では内部酸化が困難となるから、インジウム1~7%が好適である。錫を1%以下にすると粒内の酸化物粒子を均一に分散させることができなく、7%以上では酸化物粒子の大きさが不均一に析出するので1~7%が好適である。銅及び亜鉛を全く1%以下にすると粒界析出物が減少し耐溶着性が下がり、錫5%以上にすると内部酸化が困難となり、亜鉛4%以上にすると加工性が悪くなるので、錫1~5%、亜鉛1~4%とが好適である。又銀以外の添加物即ちインジウム、銅、錫、亜鉛の合計が15%以上では内部酸化が困難となるので好ましくない。更に付加的にカルシウム、セリウム、コバルト、鉄、ガリウム、ランタン、アルミニウム

特開昭52-23660(2)によつて得られる最も大きな効果は、均一に分散した層状組織が作られるため電気接点材料の耐消耗性が改善されることである。單に銀とインジウムと錫とを用いた銀-酸化インジウム-酸化錫系の電気接点材料は、インジウム、錫の一部が粒界に、他の一部が粒内に不均一に針状となつて析出するため銀-酸化カドミウム系の電気接点材料に比べ、耐溶着性は良いが耐消耗性が充分でなく、電磁開閉器用電気接点材料としては不適当である。即ち、銀中にインジウム1~7%と、錫1~7%と、錫1~5%と、亜鉛1~4%とを合計で15%以下を共添加することによる内部酸化時の相乗作用によつて酸化インジウム、酸化錫、酸化亜鉛、酸化銅の粒子が全体に均一に層状に析出し、適度に分散する結果、銀-酸化インジウム-酸化錫系の電磁開閉器用電気接点材料に比べ耐消耗性に優れたものとなり、耐消耗効果を発揮し得るものである。更に前記少量付加物の総含有量を0.7%以下に押えることによつてインジウムと銅と錫と亜鉛との共添加により得た均一な層状組織を

(4)

ム、シリコン、チタン、リチウム、マグネシウム、ニッケル、マンガン、ゲルマニウムのうちの少くとも1種を含んでその総含有量が0.7%以上になると、均一且つ適度に分散した粒内の針状酸化物粒子若しくは粒界に均一に分散した酸化物粒子を破壊したり、又その酸化物粒子を粗大に微細化したりして、インジウムと錫と銅と亜鉛との相乗効果を低下させ、耐溶着効果及び耐消耗効果に悪影響を与えるので好ましくない。

以上のような成分及びその組成範囲では、電気接点の耐溶着性には支障なく、従来の銀-酸化インジウム-酸化錫系の電気接点材料にとつて代わることができる。

次に本発明の電気接点材料の効果を一層明確ならしめるために、具体的な電磁開閉器用電気接点の製作実施例とその試験結果について詳述する。下表の表1~表3に示すものが本発明の電磁開閉器用電気接点材料よりなる実施品で、表1、表2が本発明の特許請求の範囲第1項に記載の電気接点材料、表3が特許請求の範囲第2項に記載の電

電気接点材料である。これらは通常の方法で溶解鍛造した後、ろり付をしやすくするために片面に銀を接着し、圧延加工にて 1.5 mm 厚の板になして 8.5 mm に各々プレスで打抜き、700°C 3 気圧の酸素中で 220 時間内部酸化したのち、銅合金にろり付してなる電磁開閉器用電気接点である。これらを表 4 に示す比較品及び表 5、表 6 に示す従来品と下記の試験条件にて耐消耗性能及び耐溶着性能の比較試験を行つたところ下表の右欄に示すような結果を得た。尚併せて内部酸化後の断面組織状態も下表の右欄に載せた。

	成 分 組 成 %								試験終了後の溶耗量 (mg)	5万回試験中の溶着発生回数	内部酸化後の断面組織状態	
	In	Cu	Sn	Zn	Mn	Ca	La	Cd				
本品 発明 で て よ 品	As1	2	2	2	2				表り	124	0	層状
	As2	5	6	3	1.5				"	121	0	"
	As3	4	4	4	2	0.4			"	145	0	"
比較 品	As4	3	3	3	3	0.4	0.1	0.4	"	207	3	亜甲状
従 来 品	As5	9	7						"	236	0	針状
	As6							11	"	199	0	粒状

インチング試験条件

接点寸法	8.5 mm × 1.5 mm
電 壓	200 V
電 流	165 A
力 率	0.24
通電時間	0.15 sec
開閉回数	20 回/min
試験回数	5 万回

上記の表で明らかのように本発明の電気接点材料によつて作られた表 1 ~ 表 3 の均一な層状組織を有する電気接点は、電磁開閉器用電気接点として表 4 に示す亜甲状組織を有する比較品及び不均一な針状組織を有する表 5 均一な粒状組織を有する表 6 に示す従来品と比べ著しく消耗量が少なく、耐消耗性に優れていることがわかる。又溶着発生回数は表 5、表 6 に示す従来品と同様 5 万回試験

(7)

に 1 回も発生せず、耐溶着性にも優れていることがわかる。

かように本発明による均一な層状組織を有する電接点材料は、電磁開閉器用電気接点材料として従来の銀一酸化インジウム一酸化銀系及び銀一化カドミウム系の電気接点材料と同様の優れた溶着性を有し、特に耐消耗性については一段とれていて銀一酸化インジウム一酸化銀系及び銀酸化カドミウム系の電磁開閉器用電気接点材料とつて代わることのできる課題的なものであると考える。

(8)

前記以外の発明者

チュウオウクニンベンベシカヤベチヨウ
東京都中央区日本橋茅場町二丁目一四番地三
タナカ キキンゾクコウギヨウ
田中貴金属工業株式会社内
ナイ タン モト ヒデ ヒサ
ヒサ
久

同 上

ミオザキ サトル
谷 隆 信

BEST AVAILABLE COPY

出願人 田中貴金属工業株式会社

代理人 鮎 谷 昇
次
K.D.T.

020225

手 続 補 正 書

特開昭52-23660(4)

7 補正の内容

昭和 50 年 11 月 5 日

明細書 8 頁の表を下表のとおり訂正する。

特許庁長官 斎藤 英雄 殿
特許庁審査官

1 事件の表示

昭和 50 年特許願第 99947 号

2 発明の名称

電気接点材料

3 補正をする者 特許出願人

田中貴金属工業株式会社

	成 分 組 成 %								試験終了後の消耗量 (mg)	5万回試験中の溶浴発生回数	内部腐食化後の断面組織状態		
	In	Cu	Sn	Zn	Mn	Ca	La	Cd					
本る 発明 に よ品	K1	2	2	2					及び	124	0	屑 状	
	K2	5	5	3	1.5				"	121	0	"	
	K3	4	4	4	2	0.4			"	145	0	"	
比 較 品	K4	3	3	3	3	0.4	0.1	0.4	"	207	3	亜甲状	
従 来 品	K5	9	7						"	236	0	針 状	
	K6								11	"	199	0	粒 状

4 代 理 人

東京都新宿区西新宿6丁目7-23
ストーカゼルディング901号 □160

(5712) 代理上 鳩 谷 昇 次

電話(03)743-3731(10)

5 補正命令の日付 昭和 年 月 日 (自記)

6 補正の対象

明細書の発明の詳細な説明の欄



BEST AVAILABLE COPY